いしかわの遺跡

No. 40
2012.3.28

弥生～古墳時代の溝から大量の木製品

溝内の遺物出土状況　（金沢市　直江西遺跡）

直江西（なおえにし）遺跡は金沢港に近い、標高 1.5 m 程の低地に立地します。

手取川から能登へ水を送る水道管の敷設に伴う発掘調査で、弥生～古墳時代初頭の溝が検出され、弥生土器や土師器（はじき）とともに多くの木製品が出土しました。出土した木製品は、一部が加工されただけのものが多く、完成品は少ないようです。

今年度の調査では、この他には同じ時期の遺構がほとんど見られなかったことから、この溝は木材を加工していた集落の、縁辺（えんぺん）を流れる溝であったと考えられます。

加工が施された木製出土品

財団法人　石川県埋蔵文化財センター
Ishikawa Archaeological Foundation
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731
E-mail●mail@ishikawa-maibun.or.jp　ホームページ●http://www.ishikawa-maibun.or.jp/

H23 発掘調査

北方池の下遺跡〔珠洲市〕

南西上空からみた調査地

平地式建物を構成する柱穴群

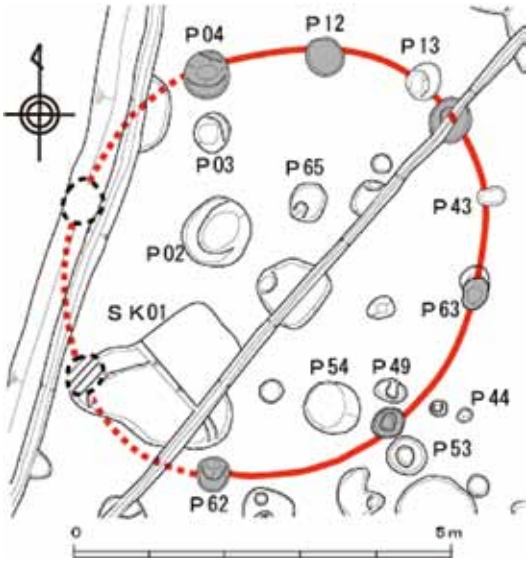
縄文時代晩期の石鏃が出土

珠洲市上戸町北方地内に位置し、宝立山系丘陵と飯田湾の間に広がる沖積地に立地します。

調査では、縄文時代晩期（3,000 ～ 2,300 年前）の遺構や遺物を確認しました。主な遺構には平地式建物があります。その建物は一部推定復元によりますが、柱穴８基が概ね等間隔で楕円状に配置されています。柱穴は径 50cm 前後、遺構検出面からの深さ 20cm 前後のものが主体をなします。

遺物には土器や石器などがあります。土器は資料の少ない縄文時代晩期末頃のものがまとまって出土しました。石器には石鏃、石錘、打製石斧などがあり、珠洲市産出の石材である玉髄質泥岩（横山真脇石）などで作られたものがありました。縄文時代晩期の建物や土器、石器は奥能登の縄文文化を語るうえで、貴重な資料となります。

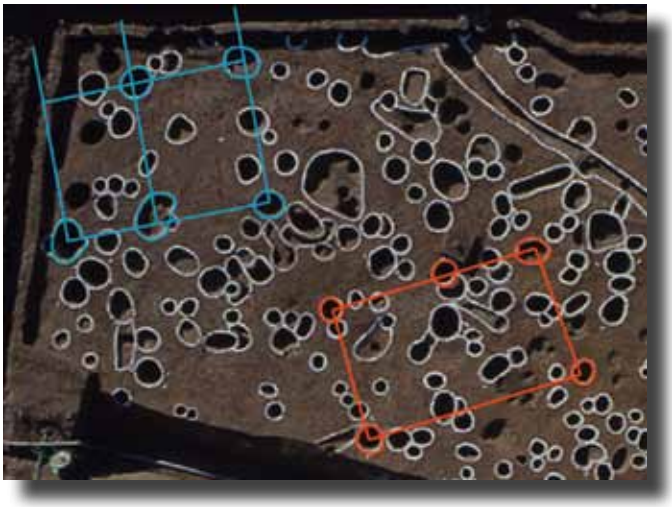
なお、別の時代の遺構や遺物として、古墳時代～古代の須恵器、土師器や中世の掘立柱建物、溝、珠洲焼なども確認しました。



平地式建物遺構図

加茂遺跡、能瀬南Ｂ遺跡〔津幡町〕

西上空からみた調査地


掘立柱建物（加茂遺跡）

加茂遺跡は、河北潟東縁部に広がる沖積低地から丘陵裾部に位置し、縄文時代から中世まで断続的に営まれました。今年度は丘陵の周りに広がる沖積地の２箇所の調査区で、古墳時代後期（６世紀）と平安時代（９世紀および 10 世紀）の集落を確認しました。古墳時代の遺構には溝や小穴などがあり、土師器や須恵器が出土しました。平安時代の遺構には掘立柱建物４棟以上のほか、土坑、溝、水田などがあり、須恵器や土師器、木製品などが出土しました。また、水田からは人や動物の足跡と見られる痕跡がいくつも確認できました。

能瀬南Ｂ遺跡は、加茂遺跡の北側に隣接する丘陵部にあります。丘陵の南側斜面を調査したところ、古墳時代の須恵器の穴窯が部分的に残っていることがわかりました。斜面の下層からは弥生土器と打製石斧、古墳時代の須恵器が出土し、表土からは中世から近世の土師器皿が陶磁器とともに多数出土しました。また、斜面下の谷部分では土坑や穴が見つかり、中世の遺物が出土しました。今回確認された窯跡については、次年度以降の発掘調査により、その詳細や近接する加茂遺跡で発掘された古墳時代の須恵器窯との関係などについて明らかになると期待されます。

水田内で見つかった足跡（加茂遺跡）

須恵器窯（能瀬南Ｂ遺跡）

環日本海文化交流史調査研究集会

この研究集会は平成12年度から毎年当センターで実施しており、今回で12回目となります。今回は「中世日本海域の墓標―その出現と展開―」をテーマに10月28日に開催しました。

中世の墓標は一般的に、石製品としての存在が知られていますが、平成19年、珠洲市野々江本江寺遺跡から古代末期～中世の木製板碑と木製笠塔婆が出土しました。これは全国的にみても稀有な事例です。研究集会では、これをひとつのカギとして、中世の日本海域で墓標がどのように出現し、変化していったかについて、各地から報告をいただき、討論を行いました。まず野々江本江寺遺跡出土の木製板碑・笠塔婆についての報告があり、次いで九州地方、山陰地方、福井県、石川県、富山県、新潟県、東北地方の順に、発掘によって得られた墓標に関連する遺物の事例報告がありました。

事例報告会の様子

木製板碑に似た遺物が出土した事例は、鳥取県や島根県といった山陰地方のものが報告されました。他の地域では木製の板碑は見られませんが、笹塔婆や板状塔婆などの塔婆類は、おおむね12世紀後半以降に出土するという様相が各地から報告されました。

討論会の様子

討論会では、これら木製塔婆の歴史的な意味に関しても活発な議論が交わされました。その中で、中世の墓標が木製から石製に変わっていったとすれば、それは、中世の社会的混乱の下で、自分や父祖の権力の正統性を永続的に顕示できる石製品が重要とされるようになった結果として捉えられるのではないか、とする意見も寄せられました。

翌日は資料見学会を開き、野々江本江寺遺跡出土木製品のほか、小島西遺跡、三室オンド遺跡（以上七尾市）、梅田B遺跡、豊穂遺跡（以上金沢市）、水白モンショ遺跡（中能登町）、南吉田葛山遺跡（宝達志水町）、浄水寺跡、千代・能美遺跡（以上小松市）など県内12遺跡16件の木製塔婆関連の資料の検討を行いました。

資料見学会の様子

古代体験

古代体験学習講座　～須恵器づくり～

10月23日（日）に開催した「須恵器づくり」は、現代の食器の原形ともいえる須恵器の「杯」や、「壺」などを製作する体験です。講座では、県内の遺跡から出土した8世紀頃の須恵器をモデルに製作を行いました。出土品の「杯」のように、円形で厚さも薄い器をつくることは意外と難しく、参加者は苦労しながら形をつくっていました。しかし次第に慣れ、なかには10点も製作した小学生もいました。

約1ヶ月の乾燥の後、11月15日から18日にかけて、古代体験ひろばにある復元古窯で、薪を使って焼成しました。焼成作業は体験者も見学しました。約75時間の焼成の後、1週間自然冷却し、11月24日に窯出し作業を行いました。

回転台を使って、形をつくります

仲良しの二人も大きな作品に挑戦

復元古窯での焼成風景

焼き上がった作品

古代体験学習講座　～古代の遊び体験～

12月4日（日）に「古代の遊び体験」を開催しました。講座では、まず出土品の解説を行い、「独楽回し」や「羽根つき」は、古くは災いを追い払う「まじない」的な性格があったことを紹介しました。次に出土品をモデルにした遊び具（羽子板・羽子、木とんぼ、叩き独楽）の製作体験を行いました。木とんぼや叩き独楽はバランスをとるのが難しく、苦労しながら木を削っていました。それがうまく完成したときの子供たちのうれしそうな表情がとても印象的でした。その後参加者は、自らが製作した遊び具で、遊び体験を行い、「遊び」の歴史と文化を体感しました。

杉の板を鋸で切って、
羽子板をつくります

3色の墨で羽子板に絵を描きます

お父さんが、小刀の使い方を伝授

独楽を鞭で叩いて回します

情報発信

講座 考古学最前線「中世北陸の宗教文化にみる交流」

講座考古学最前線は、最新の考古学研究をわかりやすく解説していただく講演会で、本年度は平成23年11月12日（土）に「中世北陸の宗教文化にみる交流」と題して、立正大学准教授の時枝務先生にご講演いただきました。時枝先生、は奈良時代に隆盛した「古密教」が、都と北陸を往来した僧侶により伝えられ、北陸から関東や東北へ向かう宗教の道が存在したことを新たに指摘されました。古代の雨乞いの儀礼では、「三鈷鐃」と呼ぶ特異な仏具が使用され、その出土が北陸に多く認められることなど、古代の仏教文化や中世の宗教文化の広がりを詳しく解説されました。

会場の県立美術館ホールに集合された「まいぶん友の会」を中心とする110名の方々は、白山の稜線を介して北陸と東海の交流があったこと、京都から能登へ伝わった木製板碑や懸仏の文化など、次々と明らかにされる宗教文化の広がりを興味深く聴講されていました。

会場風景

「まいぶん出り張り　のとを掘る」

この移動講座は、県教育委員会が県内で実施してきた発掘の成果を地域に出向いてわかりやすく報告・解説するもので、能登地区においては、平成23年10月30日（日）に穴水町の「さわやか交流館プルート」を会場として開催しました。

講座の前半では、「発掘からみた穴水の歴史」と題して、七尾湾の入江に面した比良遺跡や袖畑古墳など、穴水町の縄文時代から室町時代までの発掘成果をわかりやすく報告しました。後半の展示品解説では、縄文時代の祭祀具とみられる「御物石器」という名称が、町内の比良遺跡の出土品に由来し、奈良・平安時代の七尾湾岸には、多くの製塩遺跡が営まれていた様子などを、出土品の特徴と共に具体的に説明しました。

来場された40名の方々は、普段は眼にすることが少ない出土品に関心を示し、歴史の流れを感じていました。

展示品の解説

穴水町の会場風景

古代体験

いしかわ教育ウィーク「体験　古代の文房具」

文房具というと、何を思い浮かべますか？鉛筆やシャープペンシル、消しゴムなど、現代の私たちには種類もデザインも様々な文房具が身近に存在します。けれど、奈良時代や平安時代の人々にとっては、文字を書くこと自体、役所に勤めているごく一部の人たちなどだけができることでした。発掘調査からは、陶器の硯（陶硯）や字が書かれた木の板（木簡）などとして出土します。

11月1日～7日のいしかわ教育ウィークでは、粘土の形を整えて「陶硯づくり」を体験したり、木の板を削った後、復元製作した陶硯と筆を使って「木簡づくり」を体験することで、現代の文房具との違いを体験していただきました。

木簡づくり

字の間違いは、刀子（小刀のようなもの）で削り取ります。

陶硯づくり

遺跡から出土した陶器の硯

「木簡　年賀状づくり」

奈良時代には、宮廷で、天皇に対する年賀（年始）の儀式が行われており、平安時代の手紙文例集には、年始の挨拶文がおさめられています。そのため、身分の高い人たちには、年賀の書状を送ることが広まっていたと考えられます。私たちが出すような「年賀はがき」は明治時代になってからですが、まいぶんセンターでは、１１月２６日～１２月１１日の期間、冬季限定特別メニューとして、木簡を使った「年賀状づくり」を体験していただきました。

陶硯で墨をすって筆で字や絵をかくのはなかなかむずかしそうでしたが、ハガキサイズの木簡は、切手を貼れば郵送できるため、皆さん年賀状を送る人を思いながら、一生懸命かかれていました。

遺跡から出土した木簡
（金沢市　畝田・寺中遺跡）

体験のようす

想いを込めた年賀状が完成！

テレビ取材もありました！

アナウンサーの方も体験

収蔵品ギャラリー

当センターが保管している出土品の中から、選りすぐりの「収蔵品」をご紹介します。今回は木製の塔婆です。

収蔵品No.25　木製塔婆 －珠洲市 野々江本江寺遺跡－

野々江本江寺遺跡から木製板碑と木製笠塔婆が見つかりました。平安時代末期（12 世紀）のものです。

五輪塔や板碑など中世（鎌倉・室町時代）の石製塔婆の原型として、『餓鬼草紙』（12 世紀後半）に描かれた木製の笠塔婆や板碑が知られていましたが、全国で初めてその実物が出土し、中世の墓や墓標について探るうえで貴重な発見となりました。

木製板碑　三角形の頂部をもち、二段の深い刻みを造り出しています。碑面は平滑で、種子（仏を標示する印）あるいは銘文が記されていたと思われます。

木製笠塔婆　正面に額、頭部に笠を取りつけた形に復元できるもので、笠塔婆 1 は額と竿、笠塔婆 2 は竿のみです。

木製板碑

（額と竿）（竿の背面）

（額の前面）

木製笠塔婆 1

（竿の背面）

木製笠塔婆 2

木製板碑

残存長	193.0 cm
最大幅	30.5 cm
厚さ	12.0 cm
樹種	ヒノキ

木製笠塔婆 1

竿	残存長	190.6 cm
	最大幅	17.9 cm
	厚さ	11 ～ 13.0 cm
	樹種	スギ
額	長さ	69.5 cm
	最大幅	17.9 cm
	厚さ	2.0 cm
	樹種	アスナロ

木製笠塔婆 2

残存長	207.0 cm
最大幅	15.7 cm
厚さ	12.0 cm
樹種	スギ